

## 全国消費者団体連絡会と食品安全委員会委員との懇談会（第9回）

1. 日時 : 平成19年11月15日（木）16:30～18:15
2. 場所 : 食品安全委員会委員会室
3. 出席者 : (敬称略)

### <全国消費者団体連絡会「食品安全行政見直し検討委員会」>

- ・東京消費者団体連絡センター 池山 恭子
- ・山梨県消費者団体連絡協議会 田草川恒子
- ・家庭栄養研究会 蓮尾 隆子
- ・日本生活協同組合連合会 山内 寛
- ・主婦連合会 和田 正江
- ・全国消費者団体連絡会 神田 敏子
- ・全国消費者団体連絡会 菅 いづみ

### <食品安全委員会委員>

見上委員長、小泉委員、廣瀬委員、野村委員、本間委員、畑江委員

### <食品安全委員会事務局>

齊籐事務局長、北條評価課長、西村勧告広報課長、  
小平リスクコミュニケーション官、猿田評価調整官

4. 議事 : (司会 小平リスクコミュニケーション官)
  - (1) 委員長挨拶
  - (2) 出席者紹介
  - (3) 全国消費者団体連絡会より説明  
(「食品安全行政のまとめと今後の課題(2007年4月取りまとめ)」のリスクコミュニケーションに関する部分)
  - (4) 食品安全委員会事務局より説明  
(食品安全委員会におけるリスクコミュニケーションの役割について)
  - (5) 意見交換

5. 意見交換の主な発言 (○: 消団連側発言 △: 委員及び事務局側発言)

### ■意見交換会の開催形式について

- : 10月に生協と消団連が行ったBSEに関する勉強会は、全体の説明や質疑応答を行った後、7～8人のグループに分かれ意見交換をする形式にした。これにより参加者の参加意識も高まり、グループ内に入って頂いたプリオン専門調査会の委員や農林水産省・厚生労働省の方々に直接質問ができることで、より理解も深まり、満足度が高かった。「理解はできたが、不安は残る」といった意見もみられるが、やはり、こういった意見交換会等は積み重ねが必要と思う。
- : 大規模な人数が集まる意見交換会では、同じ消費者の立場であっても、自分と異なる意見を述べる人の後に、質問や意見を言いにくい。勇気もいる。小グループでの討議によって、素朴な質問もしやすく、消費者団体同士の交流もできる。
- △: テーマを絞り、回数を多く実施するほうがいいのかということだろうか。
- : テーマがはっきりしていれば、焦点がぼけない。説明のためなら「説明会」と最初からそのように位置づけて行えばよいが、現状は、「意見交換会」といいながらも、「説

明会」の状態になっている。

- △： BSE以外に小グループでの討議に向いているテーマはどのようなものがあるか。
- ： 輸入食品の安全性の問題に消費者の関心が高い。
- ： 現在の意見交換会は説明や講演の時間が大半で、意見交換の時間が短い。フロアからの意見や質問時間を一人2分にして、ベルをならすというのは、抵抗がある。
- △： 質問者（発言者）に対して、2分でベルをならすという方法は、確かに抵抗があると思うが、ひとりで蕩々と意見を述べる方がいることも事実。
- ： 小グループの討議は、他グループとある程度の空間を持たせる等、会場設定にも配慮が必要である。都道府県レベルでの活用の方が適しているかもしれない。

## ■「わかりやすい説明」について

- △： 消費者団体の代表の皆さんは、意見交換会や懇談会等に参加された結果を、会員の方々にどのように広めているのか。
- ： 定例会で報告している。同時に、自分がどのように理解したかについても、自然な形で伝えるようにしている。
- ： 意見交換会の内容を会員等に広めて欲しいとのことだが、納得いくまで意見交換ができておらず、質疑応答のレベルに留まっているのが現状であり、これでは会員に内容を咀嚼して、説明をするのは難しい。説明のための資料についても、どのようにポイントをまとめれば良いのか解りにくい。意見交換会に参加した内容に関しては、ニュースレター等で会員に伝えている。
- △： わかりやすいスライドというのが、とても難しい。「どこがわからない」のか具体的に知りたい。時間的に可能であれば、スライド案を消費者団体の皆さんの代表の方に見てもらい、意見を頂くようにしてはどうか。また、食品安全委員会委員が使用したスライド等はぜひ、皆さんも活用して頂きたい。
- ： とにかく丁寧に説明してほしい。消費者は、どこがわからないのかわからないというレベルである。例えば、BSE勉強会の時に、20ヶ月齢の牛というのは、来年7月時点から逆算すると、いつ生まれた牛で、その牛は様々なBSE対策の規制を受けている牛であるといったようなスライドは大変わかりやすかった。このように、具体的にイメージできるような資料が欲しい。
- ： 「全頭検査見直し」というと、検査自体をやめると思っていた人も多数いる。21ヶ月齢以上の牛の検査は引き続きしていくということが伝わっていない。
- △： ぜひ、わからないところは、こんな事を聞いては恥ずかしいのではないかと考えず、素直に質問や意見を頂きたい。皆さんのわからないところをお聞きしないと、「わかりやすい資料」を作ることは難しい。
- ： どこがわからないのかわからないという状況を聞ける関係作りをしたい。
- ： 情報の多くはマスコミが主体。マスコミ情報だけだと、行政等に対して「疑った状態」で最初から意見交換会に参加していることも多いのではないか。
- △： マスコミの報道等で不安を煽るような情報に関して、どのように考えているか。
- ： 日常的に食品安全委員会の委員のような方々と直接話す機会があれば、報道等に対しておかしいのではないかと思えるチャンスもあるが、一般的にはなかなか難しいのではないか。
- △： マスコミには、記事1つで、その紙・誌自体の売れ行きが大きく変わる性質のものもあり、情報が偏ったものになることも多々ある。日本人は、「活字にされると信用してしまう」という傾向があり、ぜひ、消費者の方々も多様な情報ルートを持つようにして頂きたい。また、新聞記事等は、どの面でどのように扱うかは、編集会議で決まり、相対的に決まるものであるといったような実態を知って頂くのも重要だと思う。

- ：取材を受ける立場になることがあるが、記者が内容について案外知らない場合が多く驚く。
- △：食品に関しては、経済系の記者が担当することも多い。食品に詳しい生活部系の記者とも懇談をする機会を設けるようにしている。

### ■BSEに関するリスクコミュニケーションについて

- △：この度、「我が国におけるBSEの国内対策を考える」といった形で、厚生労働省、農林水産省との共催で意見交換会を全国6カ所で実施している。このリスクコミュニケーションは、そもそも必要であろうか。
- ：かつて、食品安全委員会が全国50カ所でBSEの国内対策に対しての意見交換会を行ったときに、その数に大変驚いた。今回も50カ所の必要はないだろうが、ブロック単位程度の開催は必要ではないか。
- ：地方にとっては、やはりもともと開催される機会が少ないので、ぜひ、やって欲しい。
- △：情報に接しないことによる、不安感もあろう。なるべく広く国民に情報が拡がる工夫をしていかななくてはいけないだろう。例えば、放送大学のように、基本的な情報を映像などで流し、詳しい説明等はスクーリングのように全国各地で行うといったような方法を検討する必要があるかもしれない。
- ：10月の勉強会の時に、改めて評価の内容や管理施策について、整理し、説明して頂き、わかりやすかった。自分は21ヶ月齢未満の若齢牛の検査は不要だと理解している。
- ：何のために3年間の補助金を出すのかを以前に厚生労働省に聞いたとき、明確に丁寧に説明頂けなかった。これでは、不信感も大きくなる。
- ：当時、「国民の混乱を避けるため」という説明で、3年間の補助金決定がされたが、その説明自体が、現在の混乱の元凶ではないか。
- ：当時、プリオン専門調査会で評価に携わった専門家が、現在は、専門委員を離れ、新聞等で様々な発言をしている。多くの方は、自分の希望のような評価をしてくれる人を良しとする傾向がどうしてもある。そのため、かつて専門委員であった方々が、全頭検査が安全の担保だというと、食品安全委員会の評価自体に対する信頼感が揺らぐ。そのような発言をする方々と、どのように食品安全委員会はコミュニケーションを取っているか。
- △：特段コミュニケーションを取っていない。我々は科学的に淡々と、ぶれないように評価をやるだけだと思う。

### ■その他

- ：「リスク」という言葉のもつ根元の意味を、説明し続けて欲しい。
- ：消費者団体の横の連絡は、今後も図っていきたい。まずは、リスク評価がスタートであるということは、我々も認識しているので、ぜひ、確信をもって、これからもリスク評価にあたって頂きたい。

(以上)